

特 256

“THE NIPPON INDUSTR

441

濟 經 と 業 産

識 智 際 實 の 設 建 濟 經 亞 東

輯 壹 第

しと民國本日るた主盟の亞東
ぬらなばねら知もと非是て

支那の國民性

事 記 た し 即 に 際 實 他 其

月 四 年 四 十 和 昭

469

會 興 振 易 貿 業 産 本 日



* 0000313000 *

0000313-000

特 256-441

支那の國民性

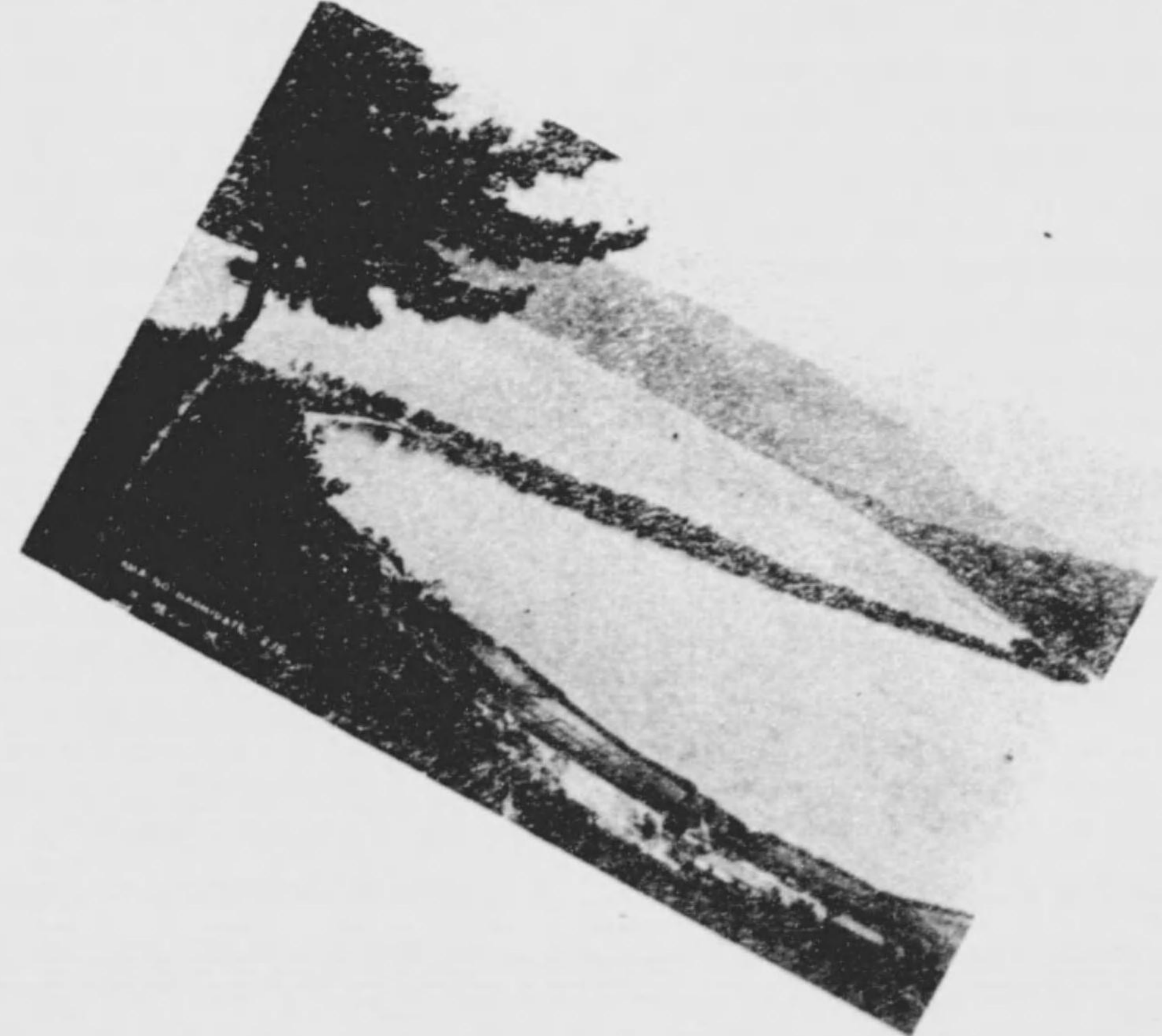
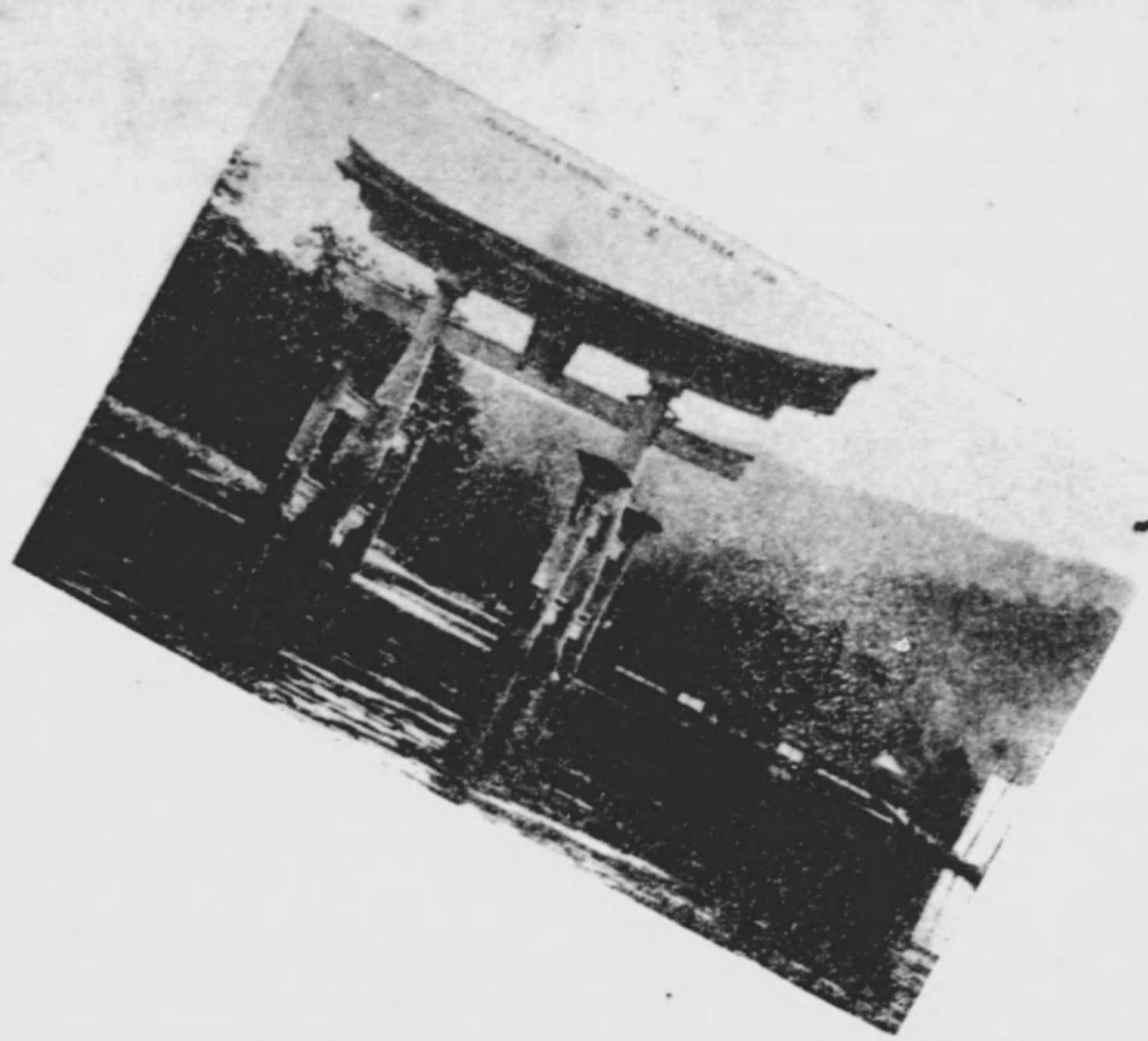
日本産業貿易振興会

改訂 2 版
昭和 14

AAB

39
27

特256
411



目次

支那なる稱號の由來と中華民國なる意義……………三

支那の國民性……………五

實利主義……………六

公共心の不充分……………〇

體面の尊重……………三

勤勞……………六

同情感恩の念の不充分な事……………三

時局を達觀して長期戦と長期建設に耐へよ……………三

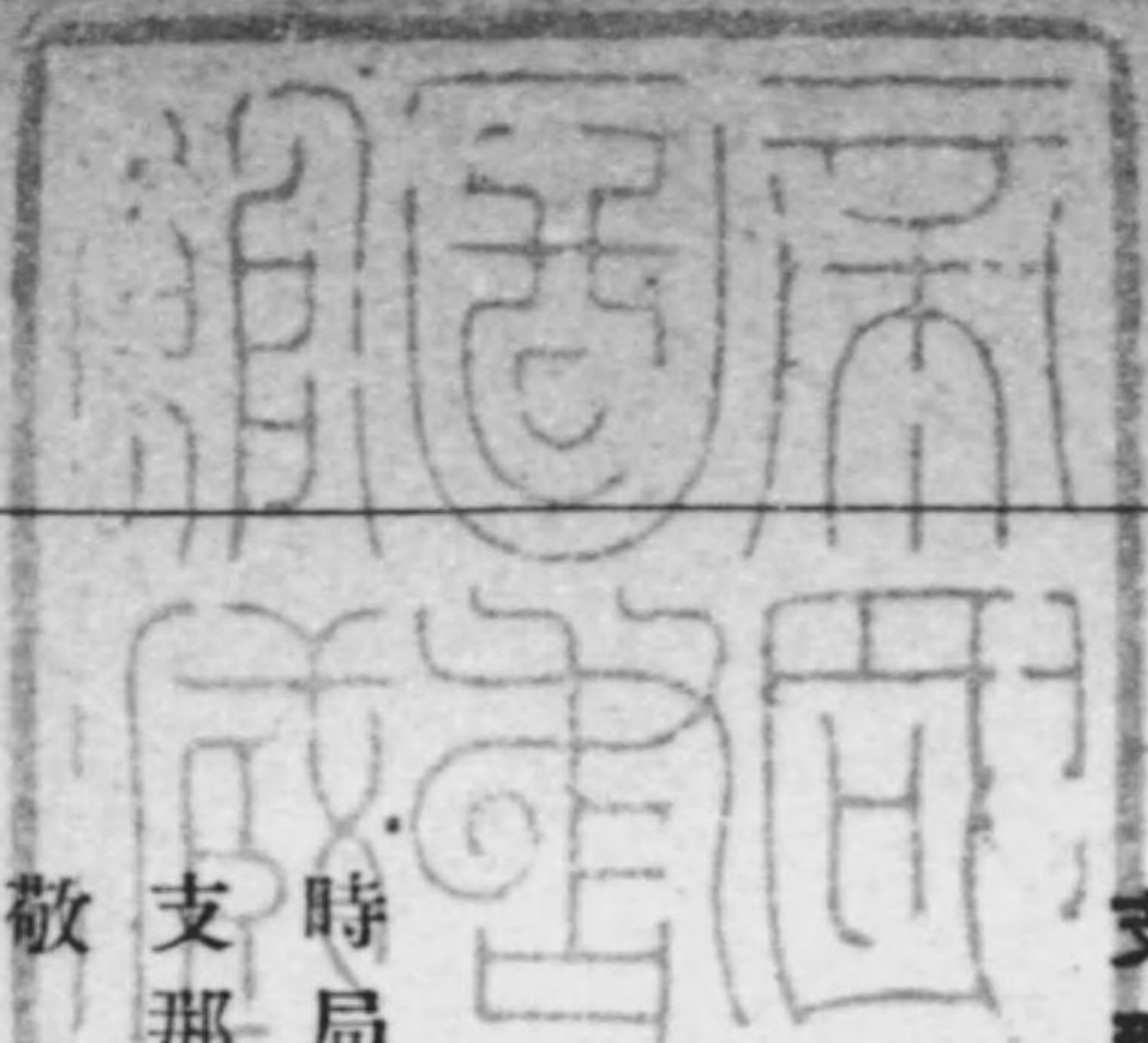
支那の屋號に就て……………三

敬避文字……………三

同文の異義……………六

無題……………六

支那料理用語……………三



謹告

- 一、外國文による「カタログ」の製作
- 一、海外各國の輸入商社の紹介
- 一、外國文による「メッセージ」の作製

右御希望の向は御通知被下度、直に社員參上可致候に付御用命の程願上候 敬具

日本産業貿易振興會

大阪市北區宗是町三八番地
電話土佐堀二〇三〇番

◎支那なる稱號の由來と中華民國なる意義

西曆前二百二十年(今を距る二千百三十七年)秦王の六國を統一して自ら始皇帝と號し、霸を天下に唱ふるや實權を悉く中央政府に收め制度を改廢して只管人心の收攬に勗め阿房宮を營み長城を築き屢々海内を巡狩して威嚴を示し、兼ねて匈奴南越等の外夷に對しても十分なる威壓を加へた。そこで西域諸國では秦音を取つてチンヌ (Chin) と稱し遙かに之を恐れて居たが、このチンヌが何時の間にかチナ (China) と訛し Chai (舌の先) が Chih (舌を卷いて出す音) と變化

し、今日の如く支那 (China) と云ふ様になつたのである。英語のチャイナ (China) も要するに Chi と na が一所になり發音の關係上、が長音となつてチャイナとなつたものらしい、支那を又一至那、脂那など書くのも全く同音から來たので、印度では之を真丹、振旦、震旦など稱し「老子是加葉菩薩化遊真丹」など物の本にも書いてある。所で支那なる名稱は勿論國號ぢやない謂はゞ通稱

だ。然らば中華民國なる名稱はといへば、是も中國と同じく彼等自ら自國を誇稱して中央文華、即ち文明中心といつた自分免許の稱號である。這麼した譯だから従つて外國人を呼ぶにも洋鬼子、夷人、外奴など言つて居る。我國人に向つては近來殆んど日本人といつて居るが、中には舊式に東洋人と稱する者もあり、少しく田舎に行くといつたやうな風がある。

次に清はもと大金或は金國汗と稱して居たが、崇徳元年（即ち明の成帝九年、我寛永十三年、西曆千六百三十六

年）に至つて改めて清と改稱した、で當時の詔勅にも「朝鮮を憎服し、蒙古の一部を平げ、更に皇帝の玉璽を得たるに依つて國號を改めて清と稱す」と書いてある。尤も是に關し曾て市村博士は下の如く説明を與へて居られる。「實際の事情は文明の進むに従ひ金國汗と稱するを耻ちて清を稱したものとされる。我國では清祖は源義經より出でたもので清和源氏の清を取つたものであると言はれて居るが、是は少しく曲解したもので、元來清と金とは呼聲の近き所から來たものと思はれる」云々と

（支那語叢談）

東亞の盟主たる日本の國民として是非共に知つて置かねばならぬ

◎支那の國民性

文學博士 幣原 坦

支那事變も長期建設の段階に入つた今日、吾々日本國民は國策に順應して一家より一名以上は必ず出でて、此大陸の建設に奉仕せねばならぬのである。新東亞の建設は眞に吾々國民に與へられたる重大使命である。此使命を遂行するに就て、先づ知らねばならぬ第一の要件は、何を置いても支那の國情と國民性である。此二者を知らずして建設もあり得ないのである、然して其國情に就いては新聞に雑誌に盛んに報せられて居るが、其國民性に就ては殆ん

◎同文の異義

田原 漢 東

直譯から大滑稽

日滿支は同文同種の國柄であるが、同文が同義でない場合がある。例へば「X 書館」などは吾々日本人には圖書館か書籍店としか思へないが何ぞ知らん、これは遊女屋の事で、又「小生」が滿支では「流産」であつたり、飛んでもない、同文異義の場合が多い。これを知らず日本から來た學校の先生等が知つたかぶり

ど説かれて居ないのである。筆者は在支二十年、元台北帝大總長幣原坦博士の「支那の國民性に關する論評」を一つの信條として之れを活用し來つたのである、筆者の親友で、今回遣歐使節として重大使命を果し、新春早々歸途來朝した、今を時めく滿洲國經濟部大臣韓雲樞氏を初め滿支人多數の知己より、常に心の友として自他共に許し合つて今日に至つたのも、此論評を信條として守つて來た賜である。故に博士の論評を中心に引用して解釋を加ふる事とした。筆者の拙筆が博士の論評を傷つく事あらば誠に遺憾に耐へない處である、此點博士に對し深く謝するものである。(天泉)

實利主義

支那の國民性は仲々單純なものではない、また見方により境遇により身分によつて色々に見える、然し先づ衆論の一致する所は第一に實利主義と云ふ事である。

支那人は根本に於て現實的であり民主的である。白鳥博士の評論によれば支那人は昔から神話を持たず、神の世界と云ふものを考へない、理想の世界として尊ぶものも昔の人の世であつて即ち堯舜時代である。光明理想を縦の上方に求めずして横の昔に求めてゐる、隨つてその説く處も對人的道徳が主となつてゐる、斯様に云はれるのは尤もだと思ふ。

未來の事とか怪力亂神とかは考慮の外であるほど現實的である、又昔から帝王はあつたけれども統治權を強行せずして無爲にして化すること恰も天地の化育

に學生に飛んでもない説明をし、また自分で偉い失敗を遣らかして居るが、其れはまだしもそれが爲め滿支人に非禮をしたり、また滿支人から輕蔑される事さへある。

ここに集録した同文異議は先輩都甲氏の蒐集になるものに私が更に註釋を加へたもので、主として日常使用されるものだけを撰んだ。

生人 面識のない人を指して云ふ。

小白臉 美少年を他の小白臉子と云ふ。

紅顔の美少年の稱であが、また青二才

といふ輕蔑した場合にも使ふ。

光棍 未婚の青年、即ち獨身ものである

先完花後結果 一姫二太郎の義で、日本

でも理想的な子供の産方であるが、支

那人も亦この産方を喜んで居ると見え

る。

大小子 小子は子供、其の上に大がある

から、長男の事である。

小先生 日本の半玉である。藝妓の事を

俳優といふが、半玉に先生の文字を使

つて居る等は追かに面白い。

休書 日本の三くだり半である。七去に

ふれた際送るものである。

の如くであるのが理想である、それ故に「帝力何んぞ我にあらんや」と云ふ様な事がよく治つた世の標語であり、民を苦しめず税を取らぬのが善政と思つてゐる。税を取つても直接税を取らぬ事である、關税を多く取るとか、政府の專賣制とする事が最もよいのである、舊軍閥等が私幣を濫發して軍費に充てたのも一つの方法である、即ち一度彼等の懐に入つたものから取らぬ事が善政と考へて居るのである。

已に現實的であるから現實を樂しむより外の望はない、現實を樂しむには勢い實利主義になる、「一簞の食一瓢の飲」で孔子は顔回を稱揚されたけれども飲食を顧みずして道を楽しむ者は支那に多くない、多くないから孔子は顔回を珍らしがられたのであらう。

現實を樂しみ度いから、國家の事業などは直接個人の頭に判然とひゞいて來ない。國でこれだけの事をするから金を出せと云はれるよりも國では何もしないで金を取り上げられない方がよい、尤も個人の生命財産の安全がなくては困る故、生命財産の安全を確保し、そうして税を少なくしてくれるものがあらば元朝でもよければ明朝でも清朝でも誰であつてもよい、そう註文通りにはゆかないから政府にも依頼せずして自分で勝手に防衛する事になる。銀行や大商店等は自衛の爲武器を用意してゐる、家屋の位置や構造によつて相違はあるが、幾何かの砲臺を造つてゐる。此砲臺には銃眼を備へてゐる、尙手製の手榴弾も幾十幾百と備へてゐる、店頭にはモーゼル式の十何連發かのピストルを握つて護衛ががんばつてゐる。それで警察の行届かぬ事等は大抵我慢する、それ故、支

姑娘 嫁の事を娘と書く。そして本當の娘は舅娘と書くのである。よく姑と娘とを間違へて譯されて居る。

掛畫 文字通りなら掛繪か、壁畫の樣だが、何ぞ計らんおめかしの事だ。

出閣 お嫁入り、即ち輿入れの事だ。

破身 身を破る、文字通りの破瓜である

破腹 腹を破る、割腹と間違つてはいけない。意中を打明ける事で、腹藏なく

語る場合に用ふる語である。

野鷄 闇門子、大抗 共に密かに春をひ

さぐ賣春婦のことである。支那には此

種の間の花が夜の街の上に、旅館に、浴場に亂れ咲く。

小生 これが日本でなら自分の謙遜稱であるが、支那語では流産を意味する。

つまり小にして生れるといふ處から出た言葉であらう。

出恭 恭々しく出るといふと何かと思はれるが、何の事はない、これは大便をする事だ。

拉尿、又は出大外、走動、解小手など

いろ／＼の語がある。

馬眼 馬の眼ではない、男子の尿道の事

である。馬口とも云つて居るが、馬の

那では國力よりも民力を重んずると云ふのが當つてゐると思ふ。

そこで「民はこれ國の本」とか「本固くして邦安し」とか云ふて民力が根本となつてゐる、この民力は個人々々が勝手に培養するもので政府にも依頼が出来ず、況んや他人を當てにするわけにはゆかぬ、従つて各個人は自分一人の働きによつて富を作り、此富によつて一生の安定を得る外はない。

「上下交々利を征して國危し」とは此民主的個人主義の弊を指摘して要を得てゐる、けれども利を征しなければ身がたぬと云ふので實利主義は昔から今日迄續いてゐる。支那人は其國が亡びるのよりも自分の財産を失ふ方を苦痛とするのであらう、等と皮肉を云ふ人があるが、これもやはり「利を征して國危し」と同義で今も昔と變らぬのである。

|| 蔣介石や宋子文一派が敗戦の今日尙英米佛乃至其他の各國より購入する軍需品に對しても「コンミツション」を取つて居る様に新聞に報せられて居る事を吾々は數々見受けるのである。||

實利主義は支那人の傳統的慣習の様になつた、實際にも金である事は古詩にもうたはれたが、享樂にも生存にも皆金である。甚だしきは裁判の如き神聖にして公平を要する事さへ金がなくては物にならない「有理無理將錢來」とは支那の裁判の奥の手であると云ふ事である。「文臣錢を愛し武臣は命を惜しむ」とは昔から文武官を戒めた諺であるが、この様な諺がある程、錢を愛する文官が多かつたのである、「君子は義に喩る小人は利に喩る」との戒めがあつても利に喩る人の多い支那の國狀を如何ともする事が出来ない|| 例へば從來駐支の

字を用ひたのは何處から來たのか判き

りしないが一寸皮肉である。

敵體 これが敵對だつたら大變だが實は

夫婦の事で敵どころではない、一心同

體である。

娘 これは娘ではない母親の事である。

千金 日本では高價値のものを形容する

場合に使ふが、滿支人は他人の娘など

を敬稱する場合にこの千金を使ふ。つ

まり意味は同様である。

迎親 親を迎へるといふ字句だが、さう

ではない。妻を娶る意味で對老婆とも

云ふ。

野種 日本では私生兒といふが、滿支人はこれを野種といふ。私生兒以上に慘酷な名稱で美しい代名詞の反面にこんな野卑なものもある。

月信 これは月經の事である。崩漏、天

發などとも云ふ。

騎着馬 月經時を云ふ。

坐草 春のビクニツクとも思はれるが

實は産婦が産氣づいた時のことである

然し何も支那人は草に坐して分娩する

譯ではない。

雲雨 雲丹ならウニだが雲雨は支那人は

男女の〇〇を云ふ。行床つまり床に行

某々國大公使の如きは相手の當路者に何十萬圓かの「コンミッション」を送つて大きな利権に調印せしめてゐる事は數々新聞紙上で散見するのである、彼等も何十萬圓かの金が得られるのであるから首になつてもよいと、國家の爲よりも己れの事を先に考へて遣つて居るのである。こふ云ふわけで各國共懸案は着々片着いて居るのであるが、日本人の性格では全く合はないのである。滿洲事變の時でも、對支懸案は三百何十と云はれた事でも分るのである。

之れも滿洲事變前の事であるが、筆者が四洮鐵路局（四平街と洮南間）に納品をした事があつた、四平街の同局の用度課で話が纏まつた時の事である「コンミッション」一萬五千圓を前納してくれと云ふのであつた、色々詳しい事を聞いて見ると、同局の近所にこふ云ふ事を辨ずる日本人が居て、電話で係員と打

ち合せて處理して呉れた事があつたのです、其日本人に聞くと此んな「コンミッション」は公然と取るのであつて、半分は北京政府へ送つて、残りの半分の又半分を局長自らが取り、以下庭掃きに至る迄が其の地位に應じて幾何かの分け前に預るのである。此種の「コンミッション」は商店でも行はれてゐるのである、葉烟草でも大豆でも靱でも、値段を決める時に何程かの「コンミッション」の交渉があつて決まるのである。此の金も支配人以下門番から庭掃きに至る迄一人残らず分配するのである。

日本の或實業家が支那を視察して歸つての談中にかう云ふ事がある、支那に一事業を起さうとすれば、第一にその地の官憲と有力家との力をからねばならぬ

く、秘戯などは日本とも共通して居るが、雲雨は流石に變つて居る。撒尿文字通り尿を撒く、即ち小便をする事であるが、撒溺、解小手、出小便などいふ文字を用ひて居る。

恭房 大便の事を出恭といふ如く其の便所のことを恭房といふ。文字から見るといとも嚴やかな部屋の様に見えるが。

手紙 どう見ても手紙である、處がさうでない。これは便所の落し紙の事で文字と實物は大變な相違である。

便宜坊 これはお手輕料理の事である。

便當 方便とも云ひ便利な意味である。小便宜 目先の小利に走る人の事を云ふ。房東 房は家で、此の場合は大家さん、即ち家主さんの事である。借字 借用證の事である。當死 支那では質屋の事を當といふ。其の當で死んだといふのだから賣流れである。

典 典は抵當の事で、つまり抵當に入れる事である。

洋行 外國に行く事を洋行といふが、支那では外來の商人の商號に使はれる「太田洋行」「加藤洋行」などと云ふ風

から、先づ捨て金をする必要がある、やうく事業が成立する段になると支那の有力家を名義だけなりとも相當の地位に据えなければならぬ、歐米人はこの呼吸が上手であるから支那人はそれと握手する、日本人は支那と唇齒輔車等と云ふけれども、實際支那人がこれと事を共にして見ると小使まで日本人を使ふのみならず、重箱に揚枝の流義で少しの事にもこせつき利益の分配も辛いと云つて支那人は日本人と共同事業をするのを好まないと、こう云ふのである。今迄に日本の各府縣や市の主権なんかで見本市を開きに行く、其の度に此コツを知らないで、領事なんかの世話で見本市を開いて、其土地の業者から反對を受けてほうほうの體で引揚げたと云ふ例も多いのである。慥か大阪市かなんかの主権で大正の始め頃廣東でこんな目に遭つた事がある様に記憶する、之れは

に。
馬桶 文字から見れば馬草か、馬水の桶の様であるが、これは室内で人間の使ふ便器で、日本でいふ「オカワ」又は「小便器」である。
兩便 兩は二つ、便は利便の便で、双方便利、一舉兩得を意味して居る。
便宜 便宜ではない、物の値段の安い意味である。
東西 品物の事で「好東西」即ちよい品など云つて居る。
分紅 紅は利益を意味して居る。即ち此れを分つ事で利益分配の事である。

一つは其土地の市價（爲替の關係等にて非常な開きがあるのが常であるが）を無視した値を出す事があるからでの原因もあるが、大抵は國民性を知らない爲でもある。

日支親善がよく行はれないのも彼の國人が親善によつて實利を收める事がむづかしいと思つてゐるからである。

實利さへあれば口にする迄もなく日支親善は實現されるに違ひない、之れから大陸の經營に當るものは正に此點を考慮すべきである。

斯様に富を得る事は支那人の理想であつて、亦その目的である、富を得る爲の手段ならば何事でも行ふ、誰も一樣にこの心を持つてゐるのだから共同事業には比較的冷淡であるが、個人の事業には熱中する、例へば大會社の組織などは

湯鍋 豚屋の事である。烏屋を鶏子、鶏小屋を鶏屋、馬小屋を馬柵など云ふが、魚の目の事を鶏眼といふ。
茶錢 茶店の事を茶館といふから、これは茶代と思はれるが、飛んでもない違ひで、實は借家する時に其の紹介人に支拂ふ手数料の事である。
行情 日本では行情調査など云つて人の素行や其他の状況を調査する場合に使ふが、支那では相場場の事で、行市とも云ふ。
交清 清く交ると讀まれるがさうでない支拂済みの意味である。

餘り成功しない、何となれば、社員が多くその私服を肥やさうとする傾向があるからである。さればとて、小組織の組合は頗る發達してゐる、これ等は大低一族親戚の者が合資の經營をするのであつて、其基礎は堅固であり、信用を重んずる事も尋常一様でない。

畢竟信用を重んずると云ふ事も、利を守るに都合がよいからである、國家の力では何事も確保してくれないから人々自分の力で自己の事を經營して行く、さうするには信用がなければ利を得られない事を充分に悟つてゐる。

萬事が實利主義であるから、少しでも他人に乗すべき點があるならば容赦なく突進する傾向がある。例へば極端な例であるが、日本から賣り込みに行けば、大低は最初二三番目位の番頭が出て来て交渉を開始する、此方では最早話が決

まつた積りで値引を或程度して置いて、其量の決まるのを待つてゐると、何れからとも分らず二人位出て来て又交渉する、それで又多少引く、之れで良いのかと思つてゐると又々他から出て来る、こんな事があつて愈々取引をする事となると豫定より大分安く賣る様になるのである、夕方宿に歸つて見ると、大阪の本店からの電報で、川口に在留の同店の出張員に賣つた値の方が遙かに高く一割五分も開きのある事に驚かされた事があつたのである、即ち、賣りに行けば、彼等は品物がだぶついて居るとか、或は仕入過ぎて困つてゐるから賣りに来るのだと直感し、少し押せば安くまけると思ふのである、こんな場合には常に、こちらが強く出なければならぬ、價格にしても一度決めたならば絶體に引く事は禁物である、それには絶體的優良品で行かねばならぬのである、尙注

解眼 湯玉の事である。

飯糰子 露天の飲食店で支那では到る處に天幕を張り柵を作つた露天の飲食店がある。

打電話 電報を打つ事を打電報といふ。然るに電話をかける事をも打電話といふ。

對折 よく店頭などに「對折克己」などの文字を見る。これは大勉強五割引の意味で。對折は五割引、克己は大勉強の意味である。

照樣 商品其他一切の見本品の事を照樣といふ。

模樣 支那人は面相、即ち顔の容貌の事を模樣といふ。「他的模樣不好」彼の面相はよいか悪いかなどといふ。

水力 水の力ではない。船賃のことで、水脚とも云つて居る。

鐘 鐘ではない、大時計の事で、懐中時計は表と云ふ。

泥性 瀬戸物や土で作つたものを云ふ、陶器の事である。

麻刀 快刀亂麻の別稱の様だが、壁紙用のスサの事である。

打落 これは日本の素見である。そして女郎を素見するのは打茶園といふ。

意せねばならぬ事は支拂ひの便宜をこちから供與する事を差し控へねばならぬのである、日本の某大財閥の如き之れに依つて非常な失敗を招き、大正の中頃滿洲より總引揚げをした例がある、此外にも鮮滿に地歩を占めて居る半官の某、國策會社も同様滿洲に進出すると共に、各地の大地主に向つて日本の金を使はせる事を勸めて之れも大いに手を焼いたのである、之れ等は等しく其國民性を知らずして行つた手落ちである。古語に前車の覆へる云々とあり、宜しく其國民性を究めて進むべきではあるまいか。

この事は唯商業上の事のみに限らず、政治上特に外交上の掛け引きにも其特徴が閃きつゝある事は最近世人の注意する處であらう、要するに實利を離れて支那人の特性を理解する事の不可能であるのは十目の見る所十指の指すところで

ある。

之れは一つの例で、從來幣制の統一されてゐない時の事であるが、五六歳位の小供でも毎朝起きるが早い。「今天老頭兒票多少錢」と、其日の日本の圓が幾何の相場であるかを先づ聞くのである、そうして多少でも自分の持つてゐる小遣錢に利が乗つて居るならば、直に兩替屋に行つて交換して其利鞘で買ひ喰ひをするのである、日本の子供の様に親から幾何かの錢を貰つて買喰ひするのではなく貯めてゐる小遣錢を減らさないで、場合によつては増やしつゝ買喰ひをして居るのである、こんな事を見せつけられると、先天的に此様に頭が出来て居るのではないかと思はれるのである。

折扣 割引の事で二割引を三成、八割引を八掛と云ふ。
顔料 繪具の事でよく化粧品の店と間違へられる。

衛生衣 どんなものと思ふと何の事は無い、莫大の事である。處がその莫大が一月も二ヶ月も酷いものになると小半年も普通しだから、事實は不衛生衣となつて居る。

洋火 ヤンホワと云つて燐寸の事である。火柴とも云ふ。

汽車 汽車でなく自動車の事で、汽車は火車と云つて居る。

鴛嘴 日本の鳶口である。支那ではモツト美化して鴛の嘴としたものらしい。

臭蟲 日本では放屁蟲と云つてさむると臭氣を放つ蟲があるが、支那では臭蟲とは南京蟲の名稱である。

生意 生氣の意味と思はれるが全然相違して商賣や職業を意味する文字である。寫眞 これは肖像を講かくことで寫眞ではない、寫眞は照像といひ寫眞屋を照像館といつて居る。

木魚 佛具の木魚とは大變な相違で、經節の事である。木魚と經節とは皮肉な對照ではないか。

公共心の不充分

前に云つた様な實利主義からして、個人主義となつてゐる支那人は 共和國に最も必要な公共心を缺いてゐるとは、西洋人の批評であるが、なる程そうかと思はれる事が多い、凡そ國民が國家に對する義務を遂行するならば、自己の權利が従つて生じ、國よりの恩恵にも浴する事が出来る、然るに支那の人は自己の繁榮が第一策で、國に對する義務等はすぐに頭に浮んで來ないのである。「井を穿つて飲み田を耕して食ふ、帝力何んぞ我にあらんや」は前にも云つた通り、昔からこの調子で人民がそれ／＼勝手に働いて満足して居るのは即ち帝徳の廣大と見なされて居たのである。

扱自己を第一に考へて、公共の爲に盡さねばならぬ職責のある官吏でさへ、動もすれば其地位を利用して富を得たがる、古來彼の國の官吏には清廉と云はれる人は極めて少い、彼等は縣知事を一年位勤めれば十萬元位ひの金が出来ると思つてゐるのである、世間話にも誰某は二三年何々縣知事を勤めてゐるから、最早二三十萬元位出來てゐるであらうと噂されるのである、そこで政治は一種の玩弄物のに様なる、國としての働きが甚だ不徹底なものも誠に偶然ではない、然し此不徹底な所が一方に於て他民族を包容する同化力にも富んでゐる所以となつたのであらう。

救濟事業なども只體面に行つてゐると云ふまでの事、支那に於ける公共事業は多く申譯の様なものに過ぎないと云はれてゐる、國家を維持するに必要な財源

田・田の雞として支那料理で珍重がられる食用蛙のことで、それとも知らず料理を注文して飛んだナンセンスをやらかす事がある。

苦酒 ビールの事を苦酒といふ。また碑酒とも云ふ。

鬼豆腐 ガンモドキとも思はれるが、コンニャクの事。

悶死 文字通りの日本読みなら悶えて死ぬる事であるが、さうではない。非常に焦慮する事で、急死とも書く。

辱死 これが自殺することである。

壽禮 目出度い禮典の様に見られるが丸つきり反對で、葬儀、又は葬儀の贈物の意味である。

搬家 お引越の事を搬家といふ。家を搬ぶといふから日本のお引越などとは形容の仕方が違ふ。

大平門 日本では劇場や活動常設館に紅い電燈を掛け非常口と書いてあるが、支那人は反對に大平門と書く。同じ意味のものが、表し方がこれだけ相違して居る。

打手銃 弄鳥、做草鞋とも云ひ自瀆行爲の事で、手銃を打つとは皮肉な形容で

となつてゐる海關稅や鹽稅の如きでさへ支那の人に任かして置くといふ缺損ばかりであるから外國人の手にかけて始めて成績を擧げ得たのである。警察の力も殆んど頼りにならない、山東の状態を見れば一目瞭然である、「ドイッ」や日本が目張つてゐた間は秩序整然としてゐたが、支那に還附するや否や馬賊土匪の横行を如何ともする事が出来ない、畢竟警察官も己れを犠牲にして公共の爲に働く事がないのであらう。

鐵道の維持等も（山東鐵道を指す）支那の人々のみでは充分行はれなかつたのである、支那の人が生命財産の安全を得るには、自分等の本國の支配下にあるよりも外人の租界を以て却つて安全地帯であるとして見てゐる、彼等の大切な金を預けるにしても、自國の銀行より外國の銀行に託する者が多い、甚だしきは自

國の裁判よりも領事裁判の方が安全であるに至つては、公職の信用のないのに驚かざるを得ない、さりとて公共心が不十分である以上この趨勢を如何ともする事が出来ない。

體面の尊重

「スミス」氏の著「支那の國民性」にも大河平隆光氏の著「支那の真相」にも支那人の通有性として第一に體面を重んずると云ふ事が擧げてある、殊に「スミス」氏は體面の事を直譯して「フェイス」と云つてゐるのは面白い、即ち日本でいふ「顔を立てる」の顔で支那ではそれを「面子」と云ふ、面子問題は日本などでも随分起る事があるけれども支那程喧ましい處はあるまいと思ふ、即

ある。

襖 立派な襖といふ字であるが、これは綿入れの衣服や、袴の事である。

打水 水を打つと書くが、撒水ではなく水を汲む事である。

暗算 暗算でなく陰謀を意味する。

告訴 告訴する事ではない、談合する、告げる事によく間違はれる。

笑 この笑ひは輕蔑的な嘲笑の場合用ゐるもので、喜び笑ふ場合は樂といふ文字を用ひて居る。

迷惑過去 人事不省に陥る事である。

僧帽 僧の冠る帽の様だが、實はルーデ

サツクの事で、如意套、保險套とも書く。

走 走るのではない、歩くことで、走る事は快走、即ち早く走ると書いて居る

背黒鍋 黒鍋を背ふ。即ちうしろ黒い事で、嫌疑を被る事である。

毛病 缺點や、惡癖の事で毛病ではない

一毛不拔 日本で各商家を袖から手を出すのも嫌ふといふが、支那人は一毛不拔といひ一本の毛も抜かぬと云つて居る。

撒春 春を撒くといふと賣春婦でもある様だが口穢なく惡口を吐く事である

ち大は國家の事から、小は一家の小事に至る迄何時もそれが現はれる。蔣介石の現在を分るるのである。即ち「蔣介石を相手とせず」となつたので一國の元主（？）として迷つてゐるのである、敗戦の今日脱出した汪兆銘の聲明を見ても日軍の國外撤兵を第一條件に和平を論じてゐるのを見ても、如何に體面に苦慮してゐるか分るのである。||

ずつと以前に東京で行はれた平和博覽會に滿洲の部（現在の滿洲國）が植民館内に入れてあつたとかで、支那の主權を無視するものであるから滿洲よりの出品を中止すべし、といつて支那人が騒いだ事があつた、これ等もその適切な一例である。

大きな顔をしたいと云ふ性質は國號を見ても直に解し得られる、中華、即ち世

界の中央の中央に座を占めた文明國だといふのであつて、他國は東夷西戎南蠻北狄、即ち禽獸の様な形容詞を用つて自分丈けが良い顔をしたのである、之れをば西洋人の中には外人輕侮と思ひ込んでゐる者があるが必ずしも輕侮のみと云ふわけではない、昔から自國だけが偉いと思つてゐた情力で唯面子の問題である、それだから今日では外國の偉い事を發見すると事實却つて外國を尊ぶ傾向さへ見えるではないか。

或る支那人が八歳の小兒を連れて來た事があつたが、其小兒は指に金の指環を嵌め人の面前で父に自動車を強請つて見え張つた事がある、こう云ふ心は斯の位いな少さい時から既にきざしてゐるのであつて、家庭の小事にも面子問題の起るのは無理もないと思はれた。

大師傳 お大師様の傳記ではない。料理人の事で、火夫とも云ふ。

親嘴 文字通りの接吻の事である。

舌耕 舌を耕す處から學校の教師を云ふ。

私逃 私かに逃げるもので日本の墮落の場合に使ふ。

吹牛皮 大きな事を云ふのを法螺吹といふが、支那人は法螺貝より牛皮を吹くと云ふ。

出馬 政界に出る時など出馬といふが、これは醫師が診察する時に使ふ、そして醫師の事を太夫と云ふ。

堤防 注意といふ意である。また小心と

錦華紡績株式會社

大阪市東區瓦町三丁目

も云ふ。

書館 書籍店と間違はれるが、藝妓屋の事である。

光身 裸體の事で跣足を光脚と云ふ。

孝衣 喪服の事で、忌中の事を孝内といひ、位碑の事を木主、棺桶材の事を壽材と云ふ。

兜 兜と間違はれるが、ポケットの事で銀兜は腹巻き、財布の事である。

支那の學生が思ひ凝らして排日の演説をするのも、よくその内情を聞いて見ると日本攻撃が眞の目的でなくして唯單に名聲を得たい爲であつたり、甚だしきは女學生の歡心を得る爲だと云ふに至つては豫想外たらざるを得ない。濟南に英米人の經營する病院があるが、診察料は極めて低廉で薬價は殆んど實費を徴收するに過ぎないが、相當の診察料と薬價とを取る日本病院に來る患者も随分多いのはやはり「面子」を重んずる所以である。實に「面子」と名聲とは支那人、特に中流以上の多くの人の行動を左右しつゝある故に政治上でも、外交上でもこの面子争ひが仲々多い。

勤 勞

金錢の自由になる上流の者は勞苦を卑しむけれども、大多數の下流者の勤勞に至つては實に非常なもので、他國人の之れに比較し敵するものは稀である、米人も勤勞を重んずるが、金錢の自由になる者も等しく之れを重んずる支那とは稍々趣きが違い、程度も異つてゐる。支那人が體力強く忍耐に富んで精力も亦絶倫な點では日本人はとても敵はない。そうしてどんな事でも金錢が得られるものならば平氣で従事する、不衛生などいふ事は一向顧り見もせず、簡易な生活は素より極度にまで實行し得る。支那人が時間を厭はず、銀貨をすり減らして其粉末を目方に掛けて賣るのを見た事がある、支那程勞銀が安く工業の有望な所はなからう、印度も随分生活が低く勞銀が安いけれども、國民の勤勉な點では遙かに支那が優つてゐる、山東

◎無 題

●君子自重と閑人免進

支那では「此處小便無用」といふ事を君子自重（君子は自重するものなり）と言つて相手に謎を掛け又「無用の者入る可らず」といふ事を閑人免進（閑人は進む）と言つて相手に花を持たせて居る、此の活殺自在なる遣口が由來支那人をして外交場裡に勝を得せしめた原因で正直一途の日本人は稍もすれば彼等の爲めに鼻をかされ易い。

●點心

點心とは元來「餅餌之屬不以時食者」の

意でかの能改齋漫錄にも「世俗例以早晨小食爲點心」云々とある如く古くは間食の意に用ひられてゐた事がわかる、それが何時の頃よりか菓子（菓子）の總合名稱に變つてしまつたのである、併し若し漢文の問題として入學試験などに出た場合にはやはり古書に據つて姑く「間食」といふの意味に解釋した方が至當と思ふ。

●花子と浪子

日本では花子と云へば何となく嬋妍窈窕たる佳人を想像するが、支那では是が乞食の意味だから驚くぢやないか、又浪子といへば先づ誰しも情緒繚綿たる不如歸

省は特に出稼人^{でかせぎじん}で有名な所であるが、毎年^{まいねん}滿洲國へ稼ぎに出る者が三十萬人から五十萬人と稱せられてゐる、これ等の出稼人は春出で、冬歸るのを例とするから滿洲の人は彼等を「人雁」と呼んでゐる、その歸る時持つて歸る金が毎年一千五百萬元を下らない、日本や米國其他南洋方面から持ち歸へる金もこれと同じ位である、何故彼等は斯様に冬のお土産金に熱中して労働するかと云ふに彼等が最も郷黨の誇りとするのは立派に正月が出来るからである。

支那人の勤勞に就いては支那人自らも認めてゐる、之れもずっと以前の事であるが、田中廣吉氏が、支那の國民性に關して教育部に問合はせた所が、その返事の中に「節儉にして勞苦に耐ふ」と云ふ一節があつたと云ふのでもそれが知れる、然らば勤勞と云ふ事は人も許し自らも許してゐる所の特性と見てよい。

同情感の念の不充分な事

「スミス」氏は支那人に同情心の缺けてゐる事を説いてゐるが、まさか支那人とても全く同情の念がないわけではないけれども、一つは自家保全に急であるのと、一つは人に馬鹿にされない用心をするのとで己れの事を犠牲にして他人の爲に盡す習慣が少いのである、従つて他人の親切や同情に遇つてもこれに感激するよりも何故にそうするかと先づ之れに對する用心をしてかゝる風があるずっと以前、ある日本の士官が支那に聘せられて身を以て衆を率いようと云ふ考へから諸生徒の間に入つて寢食を共にしたところが、支那の學生はそれを評して「彼は日本で暮しが着かない人で金を貯へる爲に支那に來たのであらう」

を想ひ出すが支那ではあな恐ろしや放蕩息子の意味となる。

●ポコペン

古いお馴染語で例へば「駄目だ」「悪い」「不可よ」等言ふ場合に廣く應用するが、元來「ポコペン」とは文字で不穀本と書き即ち「値が切れます」「本に合ひません」と云ふ意味で「そう安くは賣れません」「それちや私の方で損がいきまません」など言ふ時に使ふ言葉である。思ふに日清戦争當時日本の兵士が支那の店舗に立つて物を買ふとした折お互に言葉が通ぜぬ所から兵士の方で黙つて相手に錢

を置いて品物を持ち歸らうとすると商人は代金が足らぬからそこで盛んに不穀本をやつたものと思はれる。

●美人

美人といふ熟字は古文の方では1 美女、2 君上、3、賢人、4 漢女官名、5 虹など云ふ意味があるが、時文俗話の方では別に北米合衆國人即ち米人の意味を有する、だから支那新聞雑誌上に屢々散見する美人云々は皆米人云々のことである、知らざる内はこんな事にも迷い易い。

●チャンコロ

日本人はよく支那人を捉へてチャンコロ

といつて其親切に感じなかつたと云ふのも感激といふ事が少い事を物語つてゐる。日本では三度の食事を二度にしても彼の人を救けると云ふ事があるが、支那では絶対にあり得べからざる事としてゐるのである、斯る場合には彼等の頭には彼の外國人は三度の食事をすれば胸につかえるので一度分を自分に呉れた位にしか思はないのである、それであるから斯様な場合には彼等に對し、何等かの代償として與へるべきである。

今回の事變で在留民や宣撫班等の人々が難民に菓子や食物を與へてゐる新聞の寫眞を度々見るが非常に結構な事である、彼等としても非常に喜んでゐる、然し彼等の心には食のない吾等に、自分の貴重な食べ物を同情心から裂いて呉れたとは決して感じない、餘つてゐるから呉れた位にしか感じないのである、

彼等は貰へば必ず非常に喜ぶが、喜ぶ事と感激する事とは全然別個である事を吾々日本人は知つて置かねばならぬのである。之れはずつと以前、度々あつた事であるが、日本に来てゐる留學生に對して支那の本國から學資金を送らなくなつたので、留學生等は一齊に授業料を學校に納められなくなつた、日本の方では氣の毒に思つて金を他から繰りかへて學資を立替へ、尙對支文化事業費といふものを設けてこれ等の救済をする事になつた、然るに支那では山東還附に味を占めて更に二十一條の條約廢止を實現せしめんが爲に再び日貨排斥を開始した、すると在東京の此等の支那留學生も排日の演説會を開いたといふ。この様な事を見ると義理とか人情とかいふ事はまだ充分その心中に養はれてゐないかと思はれる、況や胸に一物あつての親切に

といふ、チャンコロとは元來中國人の訛だから、決して相手を侮蔑していふ言葉ではないのだが米國人が日本人をビヤツプと呼ぶのと同じく、聞く方では甚だしく感情を害するから日支親善の緊要なる今日我等は相戒めして成るべく之を口にせぬよう注意すべきである。

●産地の名稱を冠せる支那語例

雲石（雲南より産出する花崗石）
汾酒（山西省汾陽より産する酒）
湖筆（湖北省湖州より産する筆）
端硯（廣東省肇慶府古端州より産する硯石、俗に端硯といふ）
徽墨（安徽省より産する墨）

火腿（浙江省金華産のハム）

眉山茶（四川省峨眉山より産する茶）

紹興酒（浙江省紹興府より産する酒）

●有卵子耶

支那語を知らぬ或る日本人が支那に来て鶏卵を買はうと思つて筆談を試みた、曰く有卵子耶と、之を見た支那人は變な顔をして相手の日本人を睨めるばかり更に要領を得ない、得ない筈だ、卵子とは支那語で卵丸の意味だもの。

●軍事探偵と支那語

日清、日露の役に軍事探偵として支那人に扮装し活動した人々の中で支那語が拙

對しては早速之れを看破して反抗をするのは寧ろ當然である。

時局を遠觀して

◎長期戦と長期建設に耐へよ

最近蔣政権を支那の西南の一隅に押し遣つた様に、新聞紙に報導されてゐるが吾々としては之を見直す必要がある、即ち現在の日本の占領地こそ支那の既開發地の大部分であるが、其領土の全體に比すれば僅かに三分の一弱にしか當つてゐないのである、新聞紙の報ずる西南の一隅、其大部分は未開發地である爲め、領土を接する英佛としてはもつ々の幸ひである、天然資源に富んでゐる爲、彼等は鑛山開發、道路の新設、鐵道の布設等々と何かと進言して搾取する

かつた、めに看破されたものは殆んど無く多くは支那の風習に通ぜなかつた爲の者が多い、即ち或る者はマツチ一箇を買ひ五厘だからといつてその釣銭を取らなかつたり或は便所に行つて尻を紙で拭いたりしたが爲にとりく露顯するに至つたのだと云ふ、されば吾人は支那語研究の旁ら常に彼等の風習をも合せて研究して置く必要がある。



には口實が餘り有り過ぎるのである、之れから先、英佛としては蔣政権の勢力範圍が海岸線の全部を失ふ様にならば、尙更乘すべき機會が與へられる事となるのである。然も日本との抗戦を繼續せしむればせしむる程、彼等の自國の重工業を賑はす事となり、彼等は思ふ壺に陥りつゝある蔣政権を何時迄も主權者として遇するものと解すべきではあるまいか、故に吾々は彼等を壊滅せしむるまで戦はねばならぬのである、然して聖戦の結果、帝國は今や廣大なる地域を得たのであるから、之れが建設に長期を要する事は勿論である、故に長期建設と云ふ事は、吾々日本國民に與へられたる義務である事を認識し大決心を以て之に當らねばならぬのである。

國策だ！、吾々は之に順應して一家から一名以上出で、此大陸の建設に従は

◎支那料理用語

支那料理が衛生上如何でどんな道具で、どうして拵へる等といふ事はさて置き茶菓子(料理品目表)に書いてある用語に就き少しく説明を加へて見たいと思ふ、日本でも近來は大分支那料理を歡迎する様になつたが、併し支那に行つて居る連中が精々豚饅頭(鍋貼)、碗湯、鶏の天、浮羅(炸鶏肉)、紅燒干貝、八寶菜、積蛋湯位で、濟ます、所を見れば未だ邦人一般に料理名すら了解されて居ぬと見て差支えあるまい、希はくば、以下説

ねばならぬのである、軍人として、或は官吏、或は實業家として、亦は勞力に依つてか資本に依つてかこの聖業に奉仕せねばならぬのである。

今迄は土地狭く、持たぬ國として如何とも出来なかつたのであるが、之れからは廣大な地が得られ、持った國となつたので張り切つた吾々大和民族の伸ぶべき時が來たのであるから、或ものは鑛山に、亦或ものは農業に、工業に、商業に身を以て當らねばならぬのである。

現在の青年諸氏よ！、諸君の父祖は現在より以上に困難な事情の下に大敵と戦つて之れに打ち捷ち、今日の日本の地位を建てる事が出来たのである。

見よ！ 日清役の際の國力を想へ、父祖の意氣、そうして其努力を、其時代の支那は東洋に於ける大國として自他共に認められ、一舉に勝を制し得るものと

彼等は信じてゐたのである。陸軍の武器はどうであつたか、彼等は、「モーゼル」の連發銃であつたのに、我は村田の單發であつたのである。海軍としても彼に七千噸の戦闘艦があつたのに對して、吾には僅かに三千五百噸の巡洋艦を以て之れに對抗したのであつた、併し、氣に於て初めから支那を壓して居たのである、海に陸に困難に打ち勝つて遂に大勝を得たのである、講和條約が結ばれたるも直ちに獨佛露の三國干渉があつて、絶大なる屈辱を受けたのである、以來十年國民は臥薪嘗膽、産業人も官吏も軍人も共に非常な苦難に打ち克つたのである、一般の國民は増税其他の方法により身を以て國力の充實を畫ると共に、製艦費として官吏の俸給の二割の自發的献金、然も六ヶ年の長きに涉り行はれたのである、之れを想へば現在の國民たる者、老も若きも共に父祖の苦難

明する用語を篤と覺えて置いて茶菓子中から御自分の氣に入つたのを注文して眞實の支那料理の粹を味ははるべしであるといつて數多い支那料理のことだから總てを盡すと云ふ事は到底出来ぬ、唯大體の見當さへ付けば後は料理屋の主人なり堂信なりに就いて聞き糾して注文されたがよい。

清湯（麥湯や葛など濃厚いものを入れざる吸物、清湯は稀にして湯は厚なり）

醬（甲）清醬即ち醬油で調味すること

醬肉、（乙）、大醬即ち味噌の意、雜醬

烘（あぶる、烤に同じきも此は、とほ火にて焙ること）

炸（油にてあげる事即ち天浮羅、油はラードが普通、又燻、燻とも書く炸力香片）

拌（蓋へること、粉麵子、香油、清醬等を用ふ、熱い物ばかりの支那料理中では一寸目先が變つて居る、拌三絲）

溜（葛粉を入れて煮る事、あんかけ、溜魚片）

木梳（慕許又木須とも書く融いた卵に片栗粉を入れ味を付けたもの、木梳湯）
會（甲）、葛を入れて稀く紅く煮ること

にも勝る苦難を征服する覺悟が無ければならないのである、臺灣島でも今日の域に達するには幾十年を要したかを想へば、其幾十倍にも匹敵する新支那の開發には非常な長い期間、不斷の努力を要する事は自明の理である、宜しく時局を達観して邁進せなければならぬのである。

◎支那の屋號に就て

最近支那へ進出する實業家の數は非常に多く、此等の進出者の先づ第一に決定せねばならぬ事は其屋號である。内地其儘の何々商店でもよいのであるが、郷に入つては郷に従へである、其決定に便ならしむるため參考資料として掲載する事とした。

店舗の種類により其使用すべき文字に慣例がある、普通は三字より成るを常とするも、稀には頭字と尾字と各一字よりなるものあり、此場合多くは頭字は姓、若くは名、尾字は號、若くは記より成る。又公司、洋行、書林なる尾字と共に四字よりなるものあり、一般に尾字を見て店舗の種類を察知し得る便あり（日本に於ても斯かる例はありたるも現在は崩れたるもの多し）而して屋號用の文字は一面より見て、支那人の最も好愛する文字なる事を記憶すべきである。

甲（頭字）

三畫の部

會三鮮、(乙)、配合の意、湯(粉麵、香油を入れて作つたどろくした汁物、雞蛋湯)

包(爆とも書く、ラードでいためスープを入れて煮る、包三丁)

芙蓉(卵の白味を入れて作ること、芙蓉魚羹)

羹(菜肉を混じ粉麵を入れて作りし汁、あつもの)

焙(油で揚げたものを少しの汁中に入れること、焙蠟蝗)

炒(油にていためる事、炒肉)

排骨(豚の三枚の骨付)

紅肉(熟肉、瘦肉ともいひ赤味の肉、扒紅肉)

燉(熱と意同じ、隔湯熱物の意で即ち煮付ること、燉肉)

白果(銀杏)

燻(燻製の事、燻鶏)

紅麵(丸煮、黄悶に比し醬多し、紅焗鷄)

滂(少しく葛を入れた吸物の事、葡萄滂)

黄悶(紅悶に比し醬少し、骨付の煮付黄悶)

黄悶魚)

拔絲(皮を剥くこと、拔絲山藥)

三、大、川、山

四畫の部

仁、天、文、允、元、中、日、公

五畫の部

古、世、巨、北、正、永、四、玉、功、生

六畫の部

吉、有、成、安、同、如、合、西、老

七畫の部

亨、志、利、芸

八畫の部

和、來、長、阜、怡、昌、金、兩、東、忠、城、協、昇

九畫の部

厚、美、信、政、貞、咸、洪、泉、茂、臥、恒、承、昶

十畫の部

益、晋、恭、峻、隆、陸、海、振

十一畫の部

泰、祥、盛、通、乾、謹、涵

十二畫の部

勝、滙、裕、順、湯、華、惠、湧、會、集、發、達、雅

十三畫の部

萬、瑞、源、豐、復、聚、傳、義、煥、新

十四畫の部

榮、增、慶、廣、壽、淵、福、輔、遠、齊、魁

十五畫の部

德、億、蔚、潤

十六畫の部

紅燒 (少量の醬油を入れ油にて炙り焼くこと、葛を入れず、紅燒鶏)

黄 (卵の黄味のこと、溜黄菜)

東筍 (筍、冬筍なども書く、東筍肉)

笋肉

片 (薄く扁く切りそぐ事、焼溜魚片)

蘑菇 (菌、口茶とも書く、主に我権茸に似たる菌類をいふ、蘑菇鶏)

絲 (絲の如く細かく切る事、炒肉絲)

薑 (生薑の事、薑絲肉)

蛎 (海蛎子、蛤蠣など稱し牡蠣の事、炒蛎黄)

魚翅 (鱈の鱗、芙蓉魚翅)

丸子 (肉團子、豚肉葱卵等を麥粉にてまとめたもの炸丸子)

燕窩 (南洋産海燕の巢、通天燕菜)

清蒸 (蒸物、茶碗蒸、醬油酢葱生薑を入れる清蒸鶏)

山藥 (薯蕷、密汗山藥)

肚 (豚の胃腸、白鑼肚)

散仁 (落花生の實、散仁糖)

銀魚 (白魚、膾鱈魚、麵麩條魚などともいふ)

蝦仁 (明蝦、車蝦、龍蝦、伊勢蝦) 等の皮を剥きて蒸し干したるもの)

蜜餞 (餞を又澱と書き元來は煎より來る)

興、積、錫、凝

十七畫の部

環、濟、謙、鴻、齊

十八畫の部

鎮、雙、禮

十九畫の部

寶、懷、馥

二十畫の部

醴、瀛

乙(尾字)

局(酒、石炭、阿片の小賣所、仕立屋及冶金製材工場等)
店(家具類、化粧品、雜貨商仲買代理店及旅館等)

床(果物肉類及蔬菜等)

舖(雜貨商其の他一般的使用す)

行(卸賣及大販賣店等脚行魚行)

樓(料理屋、鈔屋商等)

號(貴金屬商及呉服商等大なる店舗)

館(料理屋寫真屋其他娯樂演藝場等、烟館、卦館)

當(専ら質屋に限らる)

園(料理屋及娯樂場等、醬園)

班(娯樓及樂器等)

染(紺屋に限らる)

堂(優等娯樓及洗湯屋、理髮屋等)

塘(専ら湯屋に限らる)

泉(湯屋及燒鍋等)

莊(嗜好品並布類商及料理屋)

棧(旅館、穀類取引商及代理店等)

記(自己の姓を字號と爲さんとする時本字を附す)

居(料理屋)

鍋(燒酎製造業等に限らる)

閣(宏壯なる建築物のもとに營業せる料理屋及娯樓)

爐(殆んど銀治屋に限らる治を用ふることもあり)

窰(煉瓦、甕瓶、其他土器石灰製造商等)

房(製粉、染織、榨油、文房具商等)

齋(書舖、鞋舖、畫舖、鐘表舖等)

飴煮、少量の油を入れ砂糖で煮固めること、蜜餞白果)

杏仁(杏の種核、蜜餞杏仁)

蜜汁(砂糖汁、蜜汁香蕉)

香腸(肉の腸詰)

鳳梨(パイナップル)

松花蛋(家鴨の卵の石灰塩漬)

江搖柱(帆立貝、清湯江搖柱)

香蕉(バナナ)

肘子(豚の腿肉、紅燒肘子)

力背(瘦肉即ち豚の赤肉、裡背とも書く)

豚肉中最上炒力背片)

三鮮(鮮を又仙に書き又三片とも云ふ)

鶏、鮑魚、海參、會三鮮)

川(汁物川三片)

手球(肉を細かく切り丸めて團子とし後油にて揚げたるもの)

三絲(鶏、筍、豚を絲の如く細かく切りたるもの)

蘭片(筍を薄くそいだもの、蝦子蘭片)

酥(菓子、佛手酥)

烤(焙る、火より離して焼く、烤鶏)

熬(煮焼、味をつけて煮る、熬菜、熬湯)

羹(茹でる、味なしに煮る、煮飯、煮)

場（車馬差立所及材木、薪炭、石材、石灰）
廠（石炭商等廣大なる院内を有する商舖）

公 司（商會、會社といふ場合に用ふ）
（公同はコムパニーより出づ）

洋 行（商店といふ時に用ふ洋行と）
（は外國の店といふことなり）

以上の外左の如きものあり

攤、舍、社、棚、櫃、籠、窖、作、工、匠、處、書林（支那語叢談）

◎敬 避 文 字

十年、二十年の永い間支那に在留せる支那通でも、一寸氣附かぬ敬避文字の在る事を紹介する事とした、例へば曆の曆を使ふ所に歴史の歴が使はれてゐるのに不審を懷きながら、其原因を知らずに過す人は相當に多いのである、そこで其由來を述べて一般の不審を解く事とした。

西曆一千六百四十四年、清の太祖努爾哈赤が父祖の遺志を繼承して、一舉忽ち

明を亡ぼし自ら皇帝の位に即き國號を清と稱せし以來聖祖（在位六十一年）高宗（在位六十年）等の明君相踵いで清朝中興の基を建て、國運峻々として中外に耀いたが不幸往年革命軍の脅す所となり、哀れや清朝も遂に二百六十八年の短き槿花一朝の夢と見て爰に脆くも散つたのであつた、で其未だ清と稱した頃、妙な慣例だが支那には敬避文字と云ふものがあつて、官民共成る可くこの種の文字を敬避して使用せぬ様にして居たのである、いや今尙これを實行しつゝあるのである、敬避文字とは即ち歴代皇帝の諱名（忌名）を指すので光緒皇帝まで九代約十七箇許の文字が畢竟此れに當るのである、流石は自ら威禮八千と稱するだけにさりとて窮屈な慣例を作つたものではあるまいか、而して敬避文字をば左の如き方法により或は字體を改め、或は他字を假り又は文字の一劃

鷄、蛋

烙（鍋等に油を塗りて焼く、烙餅）
燙（沸かす、温む、燙酒、燙水）

株式會社 稻畑商店

大阪市東區順慶町二丁目

◎支那人の好む色彩

ご動植物

迷信に起因

日本人も色彩や動植物に對し色々縁起を擔ぐが、流石に支那人は迷信の強い國民だけに一層廣範圍である。

吾々日本人が支那人と交際する上に、於て、これを辨へて置く事は極めて緊要な事であるが、今こゝに其の大あらましを綴つて参考に供する事とする。

色 彩

元來支那人は濃厚な色彩を好む。例へば赤、黄、紫、青といった様なもので慶祝の際などは淡色ものや白紙などは一切用ひない。然して色彩に對する縁起の理由としては、

金色 黄金財として最も喜ばれる。

黄 黄は漢人文明の發源と云はれ、また正色として愛用され前清時代には帝室

を増減して之れを代用し、幸じて此慣例より來る不便を補ふて居るのである、前に述べた事であるが、早い例に急就篇問答「中」の第三十七項「僭們拏皇歴瞻瞻罷」といふのがある、この時の歴は元來曆と書く可きだが曆は高宗俗に乾隆帝と稱せらるゝ皇帝の諱名、弘曆の曆だから之を敬避して歴を用ひた譯で、又同じく問答「中」の第六十四項「是寧綢」の寧も宣宗皇帝の諱名、旻寧の寧を敬避した譯である、又滿洲で大豆取引などの場合に能く使用する文字で僂又は僦（僂豆、僦裝の如き）といふ字があるが、是等も載淳載活などの諱名に對する載字の敬避文字に過ぎぬとの説がある。

一、字體を改むるもの

禎 禎（世宗諱名胤禎）

淳 淳（穆宗諱名載淳）

二、他字を假るもの

弘 宏（高宗諱名弘曆）

燁 煜（聖宗諱名玄燁）

三、文字の一劃を増減するもの

諱 訖（文宗諱名變諱）

旻 旻（宣宗諱名旻寧）

左に參考として字學舉隅といふ書から敬避字様の項中、聖祖に關する分を抄録して御目に懸る、因に原本〇印の箇所には特に當該文字を旁記して且句讀を切つて置いた。

聖祖仁皇帝廟諱上一字書〇德升。開用元字恭代。然元德元黃元鳥等字皆不得用。弦絃炫眩等字敬缺未默。率字亦宜缺點。惟畜蓄字不缺默。兩諱相並之字作茲今

用として一般使用をさへ禁じて居たが今日も同様である。

紅 紅は吉慶の表徴として最も多く使用される。新年の春聯、端午の節句などにも紅紙や紅布を多く使用するが、慶事を紅事と云ふのもこれに原因してゐる。然して紅色を大紅、桃紅、水紅の三種とし、この色に限つて淡色をも慶喜として居るのである。

藍 藍は濃厚なものが一般に愛用されるが寶藍、深藍、淺藍、品藍などの色もよしとして居る。

綠 綠色もまた濃厚を吉とするが、油綠

（若草色）沙綠、葱綠、なども慶とする。

以上五色を正色と云つて居る。

此の外庫天（うすけし紫、銀灰（きんねづみ、西湖（かめのぞき）、天青（かきいろ）、洋妃（ときいろ）、葵綠（さくじん）、油月（せいじ色）、石青（はないろ）、羔綠（みるあい）、荷灰（うらはいろ）等を吉色とするのである。

動植物

支那人の最も好む動植物は、牡丹、椿、菊、蘭、竹、桂花、七福神、柘榴、海棠、胡蝶、蟬、蝙蝠、蜂、鹿、虎、豹、象、

借用茲。舊本書有用字代者今不用。下一字諱愈文其膏沃者其光燿用燿字恭代。又从火从畢之字詩〇〇震電字典作燿。从日从華之字後漢書張衡傳列缺燿其照夜字典作燿。二字音義相近。一體敬避皆不得用。

又或る書には下の様な事が書いてあるが、是れで見れば敬避の風習は古くより行はれて居て、それが必ずしも皇帝の諱名のみではなかつた様にも思はれる。「支那に於ては古來敬避といふ一定の規則があつて、先づ第一が先聖先師と崇め奉る孔子の名丘を避けて丘陵を邱陵と書き、其他歴代革命の天子其人は勿論祖先の諱を避ける事がある。現に清朝に至つても綿を棉に、燁を煜に、曆を歴に、弘を宏に、寧を寧に改め書く」とある。又彼の臺灣私法にも「這種の文字二百有餘あり」とさへ記されて居る位である。(支那語叢談)

獅子、牛、馬、麒麟、公雞、龍、鷹、鴻雁、孔雀、鳳凰、鶴、金魚、鯉、等に於て、それには下記の様な諱がある。

馬 天馬空を行くとして喜ぶ。
鳳凰 飛禽類中最も多く喜ばれる。但しこれには必ず梧桐が配されて居る。
獅子 高貴にして強い事を好しとして居る。また悪魔除けともされて居る。
公雞 高官につくことを意味するが、これに牡丹を配すると富貴を兼るものとして縁起がられる。また牡鶏と雞頭花(四七頁上段に續く)

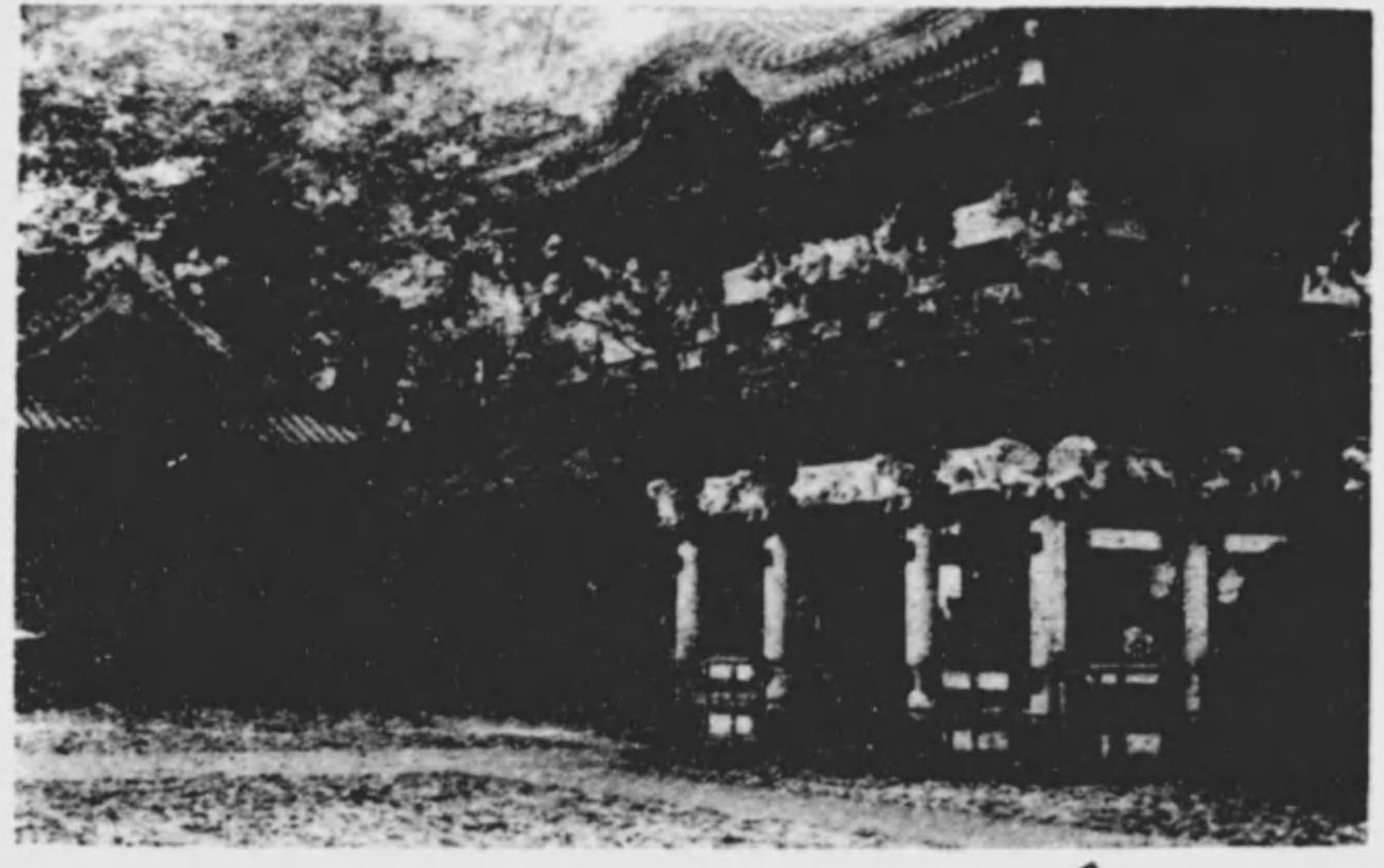
を併せて畫かく冠上冠を加へたもので官位更に高陞するものとされて居る。
孔雀 瑞鳥として吉事に描かれまた飾られる
牡丹 花の開いたのは富を意味し、未開のものは高位の貴きを意味する。
葫蘆 子孫の繁榮を表徴するものと云はれる
桃 柘榴、佛子柑と共に三仙または三多で、吉祥を意味する。
靈芝 此れに松と鶴を合せて描くと靈を表すものであるとして之を喜ぶ。
椿 壽を表す。
猿猴 封侯の侯と同音である關係上吉獸とされて居る。

龍 全能靈活高貴の意を表はす。龍には五爪龍、四爪龍、三爪龍等あり。五爪龍は昔時王室用として、四爪龍は親王家、三爪龍は一般人の用ふるものである。
鶴 之を鹿と配すると鶴の高貴と鹿の福祿とを合せたことになる。
蝙蝠 福と通じて吉兆のものとされて居る。
胡蝶 好と相通する爲め吉とする。
麒麟 獸類中の王として最も愛好されて居る
金魚 吉祥視され特に珍しい出目ものが好まれる。
鯉魚 登天の義を持つて居り、立身出世を意味する。

鴻雁 吉兆であり、また信義の鳥とされて居る
牛 天地を祝祭する時に用ふ。
また嫌悪される動植物としては、蛇、蟹、兎、鱉、鳥、鼠、龜、狗熊、柳等があり、殊に龜は嫌はれて居る。

本誌 定價一部 金貳拾五錢(郵稅共)
昭和十四年三月廿四日印刷納本
昭和十四年四月一日發行
昭和十四年四月廿五日改訂再版
發行編輯兼印刷人
大阪市北區宗是町三十八番地
弘 瀬 八 朗
大阪市北區宗是町三十八番地
發行所 日本産業貿易振興會
電話土佐堀二〇三〇番

392
270



本會ノ理事及評議員 (順序不同)

安宅彌吉 藤井滿彦
片岡孝一 松山勘太郎
吉野孝一 松下幸之助
其他

第一條 日本産業貿易振興會 定款
本會ハ日本産業貿易振興會ト稱シ、事務所ヲ大阪市内ニ置ク
第二條 本會ハ本邦ノ産業ト輸出貿易ノ振興ヲ畫ルヲ以テ目的トシ左ノ業務ヲ行フ。

一、本會ノ目的ヲ達成スルヲメ本邦輸出業者ノ外國文カタログノ製作及海外商社ノ紹介ト外國文ニヨル本邦輸出貿易品紹介誌ヲ編纂普ク海外ニ頒布シ、世界的ニ宣傳ヲ徹底セシム
二、産業貿易ノ振興ニ關スル書籍及雜誌其他必要ナル出版物ヲ編纂刊行ス
三、前各項ニ附帶スル各種ノ事業及商品取引ノ紹介並ニ斡旋等ノ業務ヲナス
本會々員ヲ分チテ正會員、準會員、特別會員ノ三種トス
正會員ハ貿易、生産、金融、倉庫、運輸、交通等ノ各業者トシ會費トシテ年額金拾貳圓ヲ齎出スルモノトス
準會員ハ本會ノ事業ニ翼賛シタルモノヲ以テシ、以後滿一ケ年間トス。

第五條 特別會員ハ一時金參百圓以上ヲ齎出シタルモノ及有力ナル産業、貿易ニ關スル團體ノ役員中ヨリ本會役員會ニテ推薦シタルモノヲ以テス
本會ニ左ノ役員ヲ置ク。

理事 會長 一名
評議員 若干名
主事 若干名
會長ハ名譽職トス。
理事ハ協議制トシ、主事ノ業務遂行ニ關シ萬違算ナカラシムルモノトス。

第六條 評議員ハ名譽職トシ本會ノ重要事項ノ協議ニ參與ス
主事ハ有給トシ會ノ内外ニ對シ一切ノ責任ヲ有シ理事ト協議ノ上業務ヲ遂行ス
本會ノ役員ハ最初總會ニテ推薦シ缺員ヲ生ジタル時ハ理事會ニテ之ヲ推薦補充ス、會長ハ役員會ニテ之ヲ推薦ス
本會ノ會計年度ハ毎年一月一日ニ初マリ十二月三十一日ニ終ル。
第九條 本會ノ總會ハ毎年春季一回之ヲ開催ス
本會ノ資産ハ編輯部事業ノ剩餘金、會費、寄附金其他ノ收入ヨリナルモノトス
第十條 本會ノ總會ハ編輯部事業ノ剩餘金、會費、寄附金其他ノ收入ヨリナルモノトス
第十一條 會員ハ總會ノ場合、納附シタル會費ノ返還及本會ノ資産ニ對シ何等ノ請求ヲナスコトヲ得ズ
第十二條 本會ノ存立期間ヲ設立ノ日ヨリ滿二十ケ年トス

第七條 評議員ハ名譽職トシ本會ノ重要事項ノ協議ニ參與ス
主事ハ有給トシ會ノ内外ニ對シ一切ノ責任ヲ有シ理事ト協議ノ上業務ヲ遂行ス
本會ノ役員ハ最初總會ニテ推薦シ缺員ヲ生ジタル時ハ理事會ニテ之ヲ推薦補充ス、會長ハ役員會ニテ之ヲ推薦ス
本會ノ會計年度ハ毎年一月一日ニ初マリ十二月三十一日ニ終ル。
第九條 本會ノ總會ハ毎年春季一回之ヲ開催ス
本會ノ資産ハ編輯部事業ノ剩餘金、會費、寄附金其他ノ收入ヨリナルモノトス
第十條 本會ノ總會ハ編輯部事業ノ剩餘金、會費、寄附金其他ノ收入ヨリナルモノトス
第十一條 會員ハ總會ノ場合、納附シタル會費ノ返還及本會ノ資産ニ對シ何等ノ請求ヲナスコトヲ得ズ
第十二條 本會ノ存立期間ヲ設立ノ日ヨリ滿二十ケ年トス

第十三條 以上

